

祝園八景を探る旅

スタート地点：祝園駅東口



① 第四景 野沢落雁



② 第二景 生馬遠霞



③ 第五景 泉河登船



④ 第三景 狛山秋月



⑤ 第八景 三笠山雪



⑥ 第七景 大途行人



⑦ 第六景 常念晩鐘



祝園八景を探る旅

文化遺産・文化的景観としての「名所」

・2004年「景観法」制定、2005年「文化財保護法」改正 ⇒ 文化的景観も文化財に

様々な「八景」と「瀟湘八景」

- ・(日本で)最も有名な「近江八景」(滋賀県湖南)、「金沢八景」(神奈川県横浜市金沢区)
近江八景・・・近衛信尹(1565～1614関白、書と歌で著名)が選定
金沢八景・・・延宝5年(1677)に来日した明の心越禪師が選定
- ・日本中に「八景」～すべての「八景」の《本歌》としての「瀟湘八景」
- ・瀟湘八景(北宋11C後半 宋迪の創始)=図+詩～日本へは鎌倉後期(13C後半)から
- ・日本の《御当地八景》の最初～「博多八景」鉄庵道生(1319～23博多聖福寺住職)
- ・瀟湘八景和歌 冷泉為相(冷泉家始祖1263～1328)から ⇒八景図+漢詩+和歌

祝園八景 ～ 享保8年(1723)「祝園連中奉納八景句集」(山城町椿井・個人蔵)

表紙と第1景は欠。惣代老人の米寿祝いのため祝園社(春日社)に奉納された八景句集摺物。第六景の常念寺は祝園にある。生駒、三笠山など大和まで広がるのは遠見八景」の趣向。江戸の水間沾徳、京都の爪木晩山・福田鞭石・鈴鹿知石など南山城の高名な俳諧師や雑俳点者の他、上狛の旦夕、綺田の如竹(東光寺如範)など南山城の俳人が主体。

南山城の俳諧文化史と精華町 ～ 平成まで続いた「冠句」の伝統



第二景 生馬遠霞

かすむなよ比丘すむ峯の遠目鏡

京都
晩山

乗慰ふ鞭にいこまのかすミかな

当所乙身

実生馬白玉姫乃女筆くま

同ト水

生馬野や業平銜遠かすみ

佐古養耳

目八長しかすめ八遥生馬山

当所鶺鴒

鬼の目もかすむ生馬や遠目鑑

同笑水

霞行生馬をつなけ菜畑山

同如柳

暗夜峠も遠し霞の隣こへ

南都鶴之

雁追ふや生馬の霞薄化粧

当所飛竜

遠霞生馬の背や無尽蔵

同任風

だるきでをはいと
にこ。に、霞魅る。仰生
変のも歌は了かこが駒
わ絶、人人生し遠のれ山
ら景、詠は駒てく地、は古
ぬは詠ん良のきな(信古
も当だき枕たの祝仰い昔
の時からもの詞。に園するから
であらもので、よう、人からは
。未。あ悪し心も多

第三景 狛山秋月

瓜の香は上天に問へ秋の月

京都 鞭石

かつら男もとなりかく也烏瓜

京都道山

狛犬も南かしらや秋の月

市田晚霞

山は高麗月八日本や模稜の手

上津谷嶺雲

狛山やからへ見送る烽の月

木津不名

しとやかに乗出すこまや峯の月

当所飛竜

柞野の明石や駆ル狛の月

稲八妻風雅

木津の馬士しはしやし八しこまの月

当所任風

しらけ来つ山こそこまや月けらし

同 乙身

月ぞ見こし狛山飾る松の心

同 守元



狛山は、高麗寺跡背後にある山である。大和国（奈良）から古北陸・東山道を北上して泉川の渡しを越えた所である。狛山を離れて行く人々が必ず仰ぎ見感じ入る場所でもあった。（山城町史より要旨）

第四景 野沢落雁

野や沢や藪にたまづさ雁の文

京都 知石

雁落て亀にはねかす野沢哉

南都隋志

沢さして琴柱外すを南かな

市田晚霞

沢霧に雁や思案の落所

佐古養耳

落し雁八臯跳し子

当所任風

行人のころひ打けり沢の雁

同 鶴枝

焼筆や八景搜る沢の雁

同 笑水

沢による雁の蹴こうす案山子哉

同 ト水

君の恩しるやしらすや沢の雁

同 飛竜

浅沢に動かぬ浪や腹またら

同 乙身



雁がどじょうや田螺などの餌を求めて下りて来る。せらぎは、今、整備されて用水路となり、木津川からポンプで揚水して田んぼに恵の水を供給している。下りてくる餌を啄んでいる。下り

第五景 泉河登船

木津の舟子淀て聞たり郭公

綺田
如竹

布の帆の雪や北より泉河

京都旭水

秋かせや真帆は魚鱗に挑川

当所鶺枝

帆にかせや夏なきとしと泉河

上津谷嶺雲

木津川や尾はなの屏風梶枕

当所笑水

洪鮎に迷ふて船やいつミ河

同 飛竜

蝉の音や糸ひき木津のほかけ船

同 任風

北かせに木の葉や木津の上り船

同 ノ心

柞野の落葉追けりほかけ船

同 ト水

帆懸ヶ船泊の茂ミに北へ行

同 乙身



掛け旅人、荷物を積んだ帆
う。舟が木津川を行き交
や。鳥たち、季節の風を感じ
なが。ら。ゆ。つたりした時が
流れる。今では考えられな
い風景だ。今では考えられな
地。形も人々の暮らしも変
す。る。淀に向かっただけは
尚、淀に向かっただけは今も

第六景 常念晚鐘

かねに蚊の夢や見残又常念寺

狛野
旦夕

はなふらん入あひ別時鐘ひらき

瓶原了中

六字不断桜に筭為楽声

伏見其友

賤の男か汗八入日そ鐘の触レ

当所鶺枝

晚鐘にはなの思ひや責念仏

南都鶴之

晚鐘や寺にも花のあるけなに

稻八妻風雅

寂滅ははなの別レそ鐘の声

当所ト水

晚鐘になくや菩提の郭公

同 任風

夕暮のおてらの鐘八雪やこん

同 乙身

かねにちる木の葉や罪の滅為らく

同 飛竜



江戸時代。ほとともよい
音。で。鳴。り。響。き。近。隣。の。住。民
は。鐘。が。鳴。り。響。き。遠。く。昔。を。偲。ん
だ。り。願。い。事。を。し。たり。と、
又。の。時。を。知。ら。せ。る。鐘。と。し。て
の。生。活。の。一。部。と。な。っ。て。い。た。も

第七景 大途行人

京と京袖のはな追へ泉河

伏見
丈水

人の背の漆にしつむ桜かな

京都郁丸

旅人の杖の拍子や八重桜

淀 寸志

はななれや大路を酒に七まかり

当所笑水

往来のひとにやせけりつくつくし

伏見木六

五月雨や淀みてかへる晒売

当所任風

ミよし野は花の盛か紙担ひ

同 乙身

奈良打ちぬをひつりかけて暑かな

同 飛竜

侘て行人も心や高野楨

同 如柳

水菜売寒サ運ふやこほり山

同 金盛



「大途行人」の大途とは、江戸時代に奈良と京都を結ぶ幹線道路の一つ、郡山街道をさしている。江戸時代の街道は、真直ぐで幅の広い古代道路である。路から、時代の狭い道も重ね、幅の狭い道も多かつたようである。

第八景 三笠山雪

雪にしれ店をかすかの三笠山

江戸
沾徳

雪折レを勻ては切ふかみかさ山

江戸雨徳

雪八覆囊三笠

当所任風

白妙や面向不背三笠山

上津屋円色

伏鹿そ雪の板行みかさ山

当所笑水

又三笠降たり六ツの花盛

伏見其友

雪や山切仲磨は鰻の味

京都汀月

雪を笠立まふ姿山若し

市田晚霞

消るかな春日野ひる八流る雪

当所乙身

薄たれ雪今そ三笠の八重桜

同 卜水



① 三笠山・若草山（標高42m）1935年に改称
② 若草山の南隣にある春日山は御蓋山（標高283m）と書いて「みかさやま」の別名がある。
八重桜・奈良を代表する花で、奈良県花、奈良市・奈良市章に用いられている。

祝園八景発句集摺物 零本一冊（四丁、欠一丁）
 享保八年（一七二三） 二〇・八×三二・三
 願主祝園連中 個人蔵

祝園から見える八景を題として、地元その他、京都・伏見・江戸の宗匠に選を頼み八十句を集め版行したもの。表紙と第一景に相当する第一丁は失われていた



祝園神社について

祭神

奈良興福寺の支配下にあったので、江戸時代は春日社と称し、祭神も天児屋根命（あめのこやねのみこと）、健御雷命（たけのみかづちのみこと）、経津主命（ふつぬしのみこと）とされています。

由緒 式内社

神社の南に武埴安彦破斬旧跡の石碑がある。古事記によれば「崇神天皇十年、孝元天皇と河内の青玉の女の波邇夜須毘売の間に生まれた建波邇夜須毘古が朝廷に反逆し、越の国を制圧に向かう大毘古命の軍に敗れた」とあり、その御魂鎮めのために四十八代称徳天皇の御代に創建されたとあります。

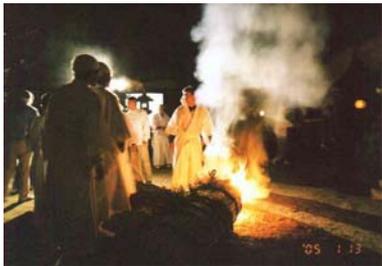
いごもり祭り

第一日 風呂井の儀 風呂の井と言う井戸で秘密の祝詞を奏し、玉串を納めます。

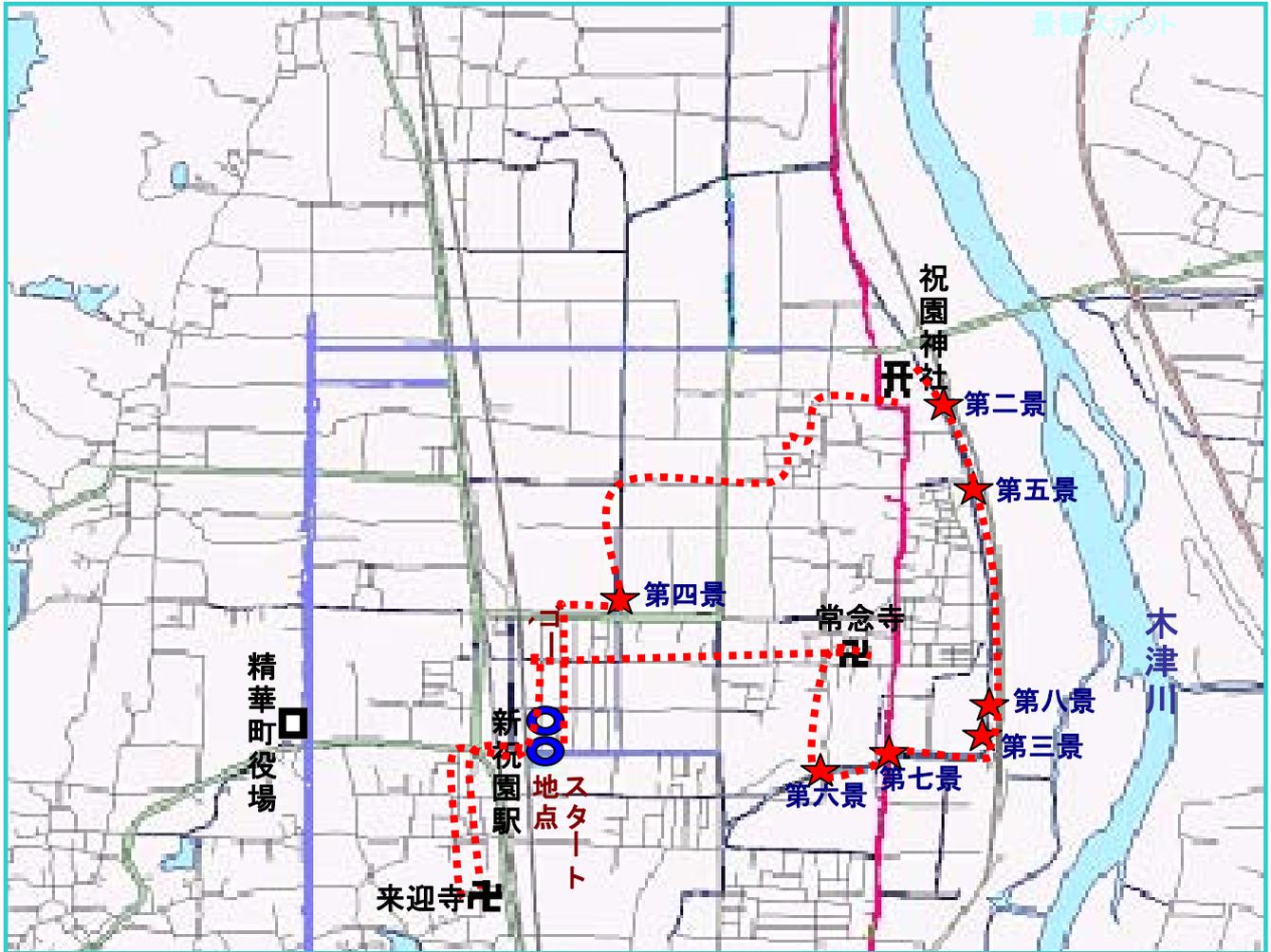
第二日 大松明を祭場に運ぶ。この時神主が鈴をならせるが、村中が消灯し一切の物音を謹慎します。

第三日

氏子が竹の輪を曳き合う行事で、神を迎え豊かな稔りをもたらす予祝儀礼であります。



歩く予定のコースと八景(七景)を眺めるお奨めスポット



..... 地図上の点線が歩く予定のコースです

★ 地図上に星印で示した箇所が八景(七景)を眺めるお奨めスポットです

- ★ 第四景 野沢落雁
- ★ 第二景 生馬遠霞
- ★ 第五景 泉河登船
- ★ 第八景 三笠山雪
- ★ 第三景 狛山秋月
- ★ 第七景 大途行人
- ★ 第六景 常念晩鐘

- ☆ 交通ルールの遵守
- ☆ ゴミは捨てずに持ち帰る
- ☆ 通り道の草花は絶対に摘み取らない
- ☆ トイレ等へ行ったり、途中で帰る場合は
必ず引率者に連絡する